
御庭番、少年記

麗蘭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

御庭番、少年記

【Nコード】

N3817C

【作者名】

麗蘭

【あらすじ】

時は江戸初期。五代目將軍の時代より話は始まった。主人公・御庭番衆の萱樂かんらくは、尊敬していた頭・服部半蔵を亡くし、心を病ませていた。二年後、御庭番衆を辞めた萱樂に、ある事態が発生する

(前書き)

徳川將軍家様、服部半蔵様、ほか忍びのファンの方々に、お願い申し上げます。これらの方々のイメージを壊したくない方は、この物語を読まない事を、強くオススメ致します。尚、読んだ後の苦情は、一切お受け致しません。ご注意ください。

刀は、何かを斬るために存在する、と人は言う。
ならば、それを握る人々は、何の為にものを斬る？
江戸の時代に繁栄が掛かりしその頃、その男は、愛剣一つを手に、
江戸の町でその生涯を賭けた。

徳川の御上に、水戸の光國様が御即位なされた、という報が江戸に渦巻いた。

江戸幕府將軍の移り、それが初代から数えて五代目であった。

無論、その頃日の国の第一繁栄地であった江戸の町では、すぐさまその報せは話題になった。

「報せじゃ報せじゃ！！水戸家の有権者、水戸光國公が將軍の座につかれたぞ！！！」

町の報道屋が、江戸の朝に報せを叫び、幾枚もの半紙を配る。

「おやまあ〜」

「今度の政が見物だね」

これだけ報道屋がいつも以上に声をあげれば、何事と人が集まってくるのは目に見えている。

報道屋の周りには、まだ朝だというのに、あつていう間に人だかりが出来、皆口々に自分の感想を述べている。

そこから少しばかり離れた小さな茶屋で、蒼の着物を纏った、まだ若いせいせい十七・八の一人の男が腰を降ろし、その人ばかりを薄目で気だるそうに見ていた。

「はい、注文の団子と茶だよ」

と、男の休んでいる座に、店の娘が品を届けに来た。

「おう、ありがとな」 彼は背中で束ねた漆黒の長髪を揺らし、軽く会釈した。

娘は彼に軽く頭を下げ、奥に退いて行った。

それから暫くして、一輪の浅い風が辺りを過った。

髪を靡かせる程度の小さな風。

それが過ぎると、今度は行き違いに、先程報道屋が配っていた半紙が、彼の足下に吹かれて来た。

彼はそれを手に取り、無意識のうちに目を通す。

「……………」

途端彼は立ち上がり目を見開くと、刀を腰に刺した。

そして驚く店の娘の手に、空になった皿と多目の金を押し付けると、ある場所に向かって、大股の素早い足取りで走り出した。

彼が見ていた半紙。そこに書かれていた記事に刻まれた名は、彼がよく知るものだった。

“御庭番衆・初代頭” 御庭番衆、徳川家將軍より、江戸城守護を任されし忍びたち。

そんな彼らを、一つにまとめ導いていったのが、初代頭・服部半蔵だった。

彼は先代綱吉公からの信頼も厚く、忠誠心の強い、仲間からの信頼も厚い、立派な忍びであった。しかし、彼はある日突然何者かに暗殺された。

任務に出る前日、何者かが彼の部屋に忍び込み、彼を刺したのだ。それからだ。御庭番たちが荒れ始めたのは。

頭を失った御庭番衆らは、任務の遂行率が下がったり、任務中の死傷者が増えたり。

だから、彼は辞めたのだ。信頼し、自分の全てで忠誠していた頭を失い、何かが抜けてしまった御庭番を。

そんな彼の名を、飛田^{ひだ} 萱楽^{かんらく}といった。幼少の頃より、忍びとして育った萱楽は、忍び一族の名家を捨て、十五で独り身になった。

そして生活費に稼ぐため、気紛れで御庭番衆に入った。彼は持ち前の身体能力、共に忍術力で、次々と昇格していった。仲間との仲も良好で、頭の半蔵からは特に気に入られていた。萱楽も半蔵を尊敬者として慕っていた故、二人の上下関係にも幸をもたらした。

しかし。

「萱楽、お前この御庭番が好きか？」「……？勿論です」
それに萱楽は、少し首を傾げて、笑顔で答えた。

「はい」

「そうか……」

半蔵は顔に皺を寄せ、微笑んで萱楽の頭を撫でる。
その会話を最後に、半蔵は暗殺された。江戸城の自室で、腹部を短刀で刺されて。

残された萱楽は、涙に明け暮れ、日に日に犯人に対する憎悪が増していった。

「……半蔵様……」

だから彼は、御庭番を抜けたのだ。半蔵を殺めし、穢れた罪人を、野放しにしておかないために。

あれから二年の月日を経て、萱楽は数え十七になった。

その間、御庭番を抜けるまでの二年、彼は密かに半蔵を殺めた罪人を探っていた。

そして手に入れた情報は二つ。

「一つは、半蔵様の殺害予想時、城の者に半蔵様の部屋から出て行く不審な男が目撃され、その数秒後半蔵の遺体が発見された事」

「二つは、その者の名を、芝田 葵助と申す事」

こうなれば、もう犯人は決まったものだ。

これを知った萱楽が行う事は、ただ一つ。誰にも告げず、自ら

の手で、芝田を牢獄に入れる事。」「芝田葵助を捜しだし、半蔵様殺害についての事情聴取を行う」

数刻後、萱楽は息を切らせ、二年振りの江戸城前に来ていた。門番がおつかないのは、相変わらずだ。

此処にもう二度と訪れようとは、全く予想もしていなかった。先程の半紙に書かれていた記事。

それは、籠に乗った光國公が、江戸城を帰還した際、何者かに矢で狙われた光國公を、近くにいた芝田が間一髪救い出したというものだった。

そして、光國公から御礼を受けた芝田は、直々に江戸城へ招かれたそうだ。

ちなみに、光國公を狙った者は、未だ搜索中らしい。

しかし、話が上手すぎではないだろうか？ 光國公を狙った者が、何人もの御付き達がいいたにも関わらず逃走し、さらには彼らを差し置き、たまたま通りかかった芝田が將軍、御上を救出した。

どこか引つ掛かるものがある。

不審に思った萱楽は、懐かしき匂いのする、江戸城門前へと足を運んだ。

しかし、いくら元御庭番衆でも、そう簡単に通してくれよう筈もない。

ならば、少々無礼ではあるが、忍びなりの訪れ方をしようではないか。

「……………」
萱楽は門前の橋脇に、息を潜み様子を伺っていた。

「……………」ここに、我が仇がいると……」

しかし、芝田はどうして御上を助ける事が出来たのだろうか。

萱楽は暫くじっと考える事にした。

そして、

「……御上の御命か……！！！」

結論に行き着いた萱楽は、目を見開かせ小さく声を上げ驚愕する。「もし、光國公を襲った者と葵助が繋がっていれば……？そうすれば全て納得がいく！！」萱楽の額から、一筋の汗が流れる。

「動機は兎も角、芝田が仲間に光國公を襲わせ、そこで芝田が光國公を押し助ければ、そちらに集中がいく。その間に仲間を逃がし……」

確かに考えづらい読みだが、半蔵殺害容疑者である彼だ。万一もあるかもしれない。

そうなると、今一番危ういのは。

「光國公！！！」

萱楽は門番に気付かれぬよう、城の裏へと周り、それから屋根上へと高く跳躍した。

江戸城屋根裏。

萱楽は未だ頭に鮮明に残る、江戸城内装を頼りに、將軍・光國の部屋の上に身を置いていた。

辞めたとはいえ、今まで情報収集をしていた、元御庭番衆忍びの彼にとつて、たかが城の屋根上に忍び込むなど、容易い事であった。

「いやいや、大儀であった、芝田ノ葵助よ」

「有り難きお言葉……」屋根下から聞こえてくるは、二つの男の声。辺りに人の気配も無いことから、どうやら室内には二人だけのようだ。

おそらく、もう一人を誉める声が、將軍のものであろう。

そして、もう片方が自分の待ちわびていたあの。

萱楽は、ギリリと唇を噛み締める。今にも飛び出して、芝田を捕まえて、問いただしたかった。

「ところで、將軍様」

「ん？なんじゃ、申してみよ」

辺りに短い沈黙が流れる。

「將軍様は、芝田懸七しばたけんしちをご存知でしょうか？」

それは、感情の籠っていない、冷たい声であった。

「芝田懸七？誰かな、その者は」

「お忘れですか。ならば教えてしんぜましょう」

屋根上からでもわかる。芝田は今、御上に強い念を持っている。

萱楽の眼に、鋭い力が入る。

「二年前、まだ綱吉様が將軍の座につかれていた時。貴方様は我等忍びの小一族を雇い、綱吉様に將軍の座を光國様に譲るよう脅す事を、ご依頼されました」

すると光國の表情がいつきに強張る。

(何だ……？まさかこんな事が……)

「しば、た……？……お前、まさか……！！！」

「思い出されましたか？……私はある日、貴方のご依頼通り、かの綱吉公を脅そうとこの江戸城を訪れました。しかし、私はその時、重大な失敗をした」

光國公は、僅かに震えたまま、動こうとしない。その目は、恐怖に駆られている、ともとれる。

そんな光國公を目線を下げて見下し、芝田は言った。

「決定的な誤りだった。私はあの時、無関係の御庭番の頭を刺してしまった」

屋根上にいる萱楽の瞳が、驚きの色へと変わる。

(……………！！！！)

「最初のうちは、私も自分を責めた。しかしよくよく考えてみれば、彼方も御庭番衆だ。忍びとして、死の覚悟は出来ていた筈だ。ならば方がないのではないか、と」

仕方ない？

こいつは何を言っているのだろうか。

そんな事で、そんな理由で、半蔵は殺されたのだろうか？こんなやつに。

萱楽の頭にふつつつと怒りが込み上げてきた。

眼に力がこもり、黒い長髪が、肩からさらりと零れ落ちる。

白い頬も、だんだんと朱が混ざってきた。その間も、下での会話は続けられる。

「綱吉公の脅迫に失敗した私は、一度一族に戻ろうと、その日のうちに自宅へと帰宅した」

芝田の表情が曇る。

「しかし、私が帰って来た時には、一族は皆息途絶えていた。そして、唯一息をしていた者が、死に間際にこう言った。『あれは徳川の使者だ』とな」

シャツ ……

「ひつ…」

刀を抜刀する音と、御上の甲高い小さな悲鳴が、萱楽の耳を過った。

萱楽はそれを頭で理解する前に、本能的に体が先に動いていた。

キン ……

耳に響く、刀が交わる音が辺りに轟く。

光國は、恐る恐る瞼を開けた。

「……何者だ」

葵助が先に口を開く。

生憎、葵助と光國からは、萱楽の目元は髪に隠れて覗けないが、彼から漂う空気で、彼が怒っている事がわかる。

すると今度は、萱楽がゆっくりと口を開く。

「……人を殺しておいて、侘びる心の一つも持てないのか…」

萱楽は乾いた音を立て、葵助の刀を弾き飛ばした。

「な……？」

刀を無くした葵助は、恐怖と驚愕の眼差しを、萱楽に向ける。

同様に光國もだ。

「お前は……、いったい……？」

何者だ？と、告げる前に、萱楽は素早く葵助の喉すれすれに、刀

を突き付ける。

「お前が、もし依頼を拒否していれば、」

萱楽は、膝をついて腰を抜かしている光國の腹に、亀裂な蹴りを入れる。

すると光國は後ろに脆く倒れ、すぐに気を失った。

「もし、御上がこの男に依頼をしていなかったら、頭は、半蔵様は死なずにすんだんだ……」

「お前……」

「半蔵様は、お前達に翻弄されて、亡き者となったんだ……！」

萱楽は最後、空いているもう片方の手で、葵助の面を思いつきり殴った。

その後、江戸はどうなったかはよく知らない。

私はあの後、御上を殴った事がばれたらまずいと悟り、すぐに江戸を立ち退いた。

風の噂で聞いた話、光國は即位後すぐに解雇されたいらしい。これで私が手配される事はないだろう。

そして、芝田葵助という男も、重罪の刑に処された。

そして私かというと。

「……あら？萱楽さん？」

江戸の小さな茶屋の娘が手を止め、一人の男を見つけた。

此方に向かつて来ている彼は、数月前と全く変わらない、穏やかな表情であった。

『萱楽、お前この御庭番が好きか？』

『はい！』
『そうか…』

半蔵様、私はやっぱり、半蔵様の御庭番衆が好きです。

三年後、御庭番衆に、齡二十歳という史上最年少の、新たな頭が誕生した。

傍らには、小さな茶屋の看板娘を置いて。

この物語は、フィクションです。実際の歴史と違うところが所々御座います。ご了承下さい。尚、字の誤りがあるかと思いますが、御承諾願います。

このように下手な作品ですが、この作品の著作権は、放棄しておりません。

(後書き)

最後まで読んで頂きまして、誠に有り難う御座いました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817c/>

御庭番、少年記

2009年3月24日10時12分発行